

住 民 「家の前の道路、直して下さい」

市役所 「場所はどこですか、教えてください」

道路の近くの住民が、道の修理を市役所に連絡し依頼する。

現代の道の補修は、住民は税金を納めているのだから、その金で道の補修を市役所に頼み、大きい修理なら市役所は建設業者に依頼し、その工事代金はその税金から出して支払う。フツウの話だ。

江戸時代、道の補修はどうしたのだろうか。これがよく判らない話だ。

東海道・中山道など五街道とその脇道は江戸幕府の道中奉行が支配した。その他は、江戸幕府の勘定奉行が支配し各藩の管理にゆだねられていた。

それなら、東海道の修理は道中奉行に「道、直してね」と依頼し、藩の道なら藩に「道、直してね」と依頼すればいいと思うが、時代劇で道を直している侍を見たことはない。現在でも、市役所の職員が道の修理を業者に頼んでいるのだから、江戸時代の工事業者に依頼したのだろう。高い年貢を納めているのだから当然である。

住民「家の前の道を直したいがよろしいでしょうか」

役人「なに一、もうすぐお殿様が通られるのだぞ、すぐ直しておけ」

道の補修は、沿線の住民が藩にお伺いをたてて自分らで修理する。

これが、江戸時代の道の修理のフツウの話し。藩が行う道の管理は、伺いを聞き偉そうに返事するだけで金は出さない。その藩をコントロールしている＝「支配」しているのが勘定奉行で修理することはまずない。僅かばかりの公儀橋の費用を出したり、並木の樹木の費用を出したりたまに出したようだが、どうもアドバルーン的にほんの一部負担したことを恩に着せる魂胆が見える。

幕府や藩がすることは、街道の馬・籠などの費用を決めたり、上から言われることを町の代表に伝達し、住民にやらせることだろう。

何処だったか忘れたが、山間の田舎を歩いていると地元の人が道にコンクリートを敷いているのを見たことがある。地元の人に聞くと「道普請」でやっていると言う。ごく自然に道を直していた。市の管理する道路でないかも知れないが、ひと時代前はよくやった話だそう。みんな自分らで共同して村の事は村でやるのが当然のように道の修理をしていた。